

緒言

今回、20代の初産婦が、母乳育児中に、乳児訪問で体重増加不良のため人工乳を勧められ、助産院では母乳を勧められたため、母乳育児に不安が強くなった症例を経験した。地域育児支援の助産師が介入を行い育児不安が軽減した。産後の母親を支援する場合、母親の心情や環境などを考慮した個別な支援介入の重要性について、専門職間で共通の認識を持つておくことを再確認したので報告する。

症例 20代、初産婦。産後4か月で母乳育児について支援を求めたA氏。

(既往歴・家族歴) 特記事項なし。

(生活歴)

- ・保育士として障害者施設で結婚前は働いていた。
- ・夫は、介護福祉士。
- ・出産歴なし。妊娠期間中、重大な合併症もなく経過は良好。生下時体重3,600g。

(産後)

出産

出産病院 母乳育児推進

産後1か月

夫の転勤で転居。知人なし

産後3か月

乳児訪問 保健師

体重増加不良(体重5,400g)と乳頭の形が悪いので飲みづらいからと人工乳を勧められる

開業助産院 助産師

母乳を飲ませるように

夫がうつ病で1年間休職となる

地域育児支援施設 助産師相談

母乳を飲ませてもすぐ泣く。

体重が増えない。

A氏

困惑・不安(泣き止んでほしい。体重が増えてほしい)

地域育児支援

支援介入

A氏

助産師



- 乳房の診察・直接母乳・混合栄養の方法について月に2回支援介入
- 離乳食の進め方と卒乳についてアドバイス
- 月に2回の体重測定で増えている事を確認
- 預かり保育を紹介
- 話を傾聴し頑張っていることを認める



1年半で支援終了

- 子どもの体重は順調に増加
- 不安の訴えは軽減
- 夫は回復し、再就職のため転居

考察

本症例は、母乳育児に混乱をきたし、家族や友人のサポートがない孤立した環境で育児とうつ病の夫の世話で不安が強くなった。しかし、地域育児支援施設の助産師・保育士の介入により育児や夫の世話が継続できた1例である。退院後の母親にはサポートが必要なことは先行研究より周知されている。産後の母親を支援する場合、母親の心情や環境などを考慮した個別な支援介入の重要性について、専門職間において共通の認識を持つておくことや地域における専門職者間の連携が重要であると考えた。

文献

- 1) 永森久美子, 土江田 奈留美ら. 母乳育児をしている母親の混乱や不安を招いた保健医療者のかかわり. 日本助産学会誌 24(1), 17-27, 2010
- 2) 菊池信正, 久保祐子, 戸松邦也. 母乳育児の疲労より発症した産褥精神病の1例, The KITAKANTO Medical Journal 54(1), 13-15, 2004

倫理的配慮: A氏に研究目的と不利益をこうむらないこと、研究参加中断を説明し、個人が特定されないよう配慮することを説明し同意を得た。